



Title	チュラロンコン大学インターナショナルプログラムにおけるクオリティカルシンキング教育の実践
Author(s)	望月, 太郎
Citation	大阪大学大学教育実践センター紀要. 2010, 6, p. 77-86
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/11832">https://hdl.handle.net/11094/11832</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## チュラロンコン大学インターナショナルプログラムにおける クリティカルシンキング教育の実践

望月 太郎

A Practice of Critical Thinking Education in the International Program at Chulalongkorn University

Taro MOCHIZUKI

This is a report on my teaching of the BBA 'Philosophy and Logic' course at the Faculty of Commerce and Accountancy, Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand. I taught the first half of this course, the logic part, as a visiting professor for seven weeks from August to September 2009. In my class with both Thai and European students, I tried to stimulate students' critical thinking ability by means of the art of dialectical questioning. I observed a significant difference in reaction between Thai and European students: Thai students tend to stick to 'correct' answers which they assume will be provided by teachers, while European students look for alternatives. Critical thinking education needs to become adjusted to the Asian teaching climate where teacher-student relations involve a stronger power relation.

### はじめに——チュラロンコン大学の インターナショナルプログラム

はじめに、タイ王国の高等教育を簡単に紹介しておこう。この国には、現在、78の国立大学がある。その内63が入学試験を課す大学であり、2つが入学試験を課さないオープンユニバーシティである。また、その内13が国立大学ではあるが独立行政法人化された「自律的大学」(autonomous university)であり、そのなかには2つの仏教系大学が含まれる。さらに、69の私立大学と19のコミュニティカレッジがある(2009年2月現在)。大学等の高等教育機関は政府の高等教育委員会(Commission on Higher Education, CHE)の監督下にあり、この委員会が国民経済社会開発計画及び国民教育計画に対応した高等教育開発政策の立案と施策に関する権限を持っている。また、同じ委員会が高等教育の資源を提供すると同時に、基準を定めて高等教育機関の運営に対する評価を実施する。CHEは、現在、高等教育開発のための長期計画(2000年~2014年)を推進中であり、計画においては高等教育の国際化を中心的課題の一つとして位置づけている。さらに、高等教育の質保証に関しては、国民教育基準・質評価監督局(Office for National Education Standards and Quality Assessment, ONESCA)が2000年に

設立され、いわゆる外部質保証にあたっている。

タイの学年歴は、通常は第1セメスターが6月に始まり10月に終わる。そして第2セメスターが11月に始まり、翌年3月に終わる。また、サマーセッションが4月と5月にわたって行われる。この間は、通常、夏期休暇である。インターナショナルプログラムの場合、通常の学年歴に従わないこともある。私が授業を担当したチュラロンコン大学商・会計学部インターナショナルプログラムBBAコースの場合も、第1セメスターは、8月に始まり、9月末の中間試験を挟んで、12月上旬に実施される期末試験をもって終わるものであった。1セメスターは16週間の授業期間から成り、そのうちには中間・期末試験も含まれる。

成績評価に関しては、タイの大学はGPA制度を採用している。A (Excellent) を4.00とし、以下、B+ (Very good) を3.50, B (Good) を3.00, C+ (Fairly good) を2.50, C (Fair) を2.00, D+ (Poor) を1.50, D (Very poor) を1.00とする。また、F (Failure) すなわち不合格は0.00であるが、その他にもケース・バイ・ケースでI (Incomplete) やW (Withdrawn) などが与えられ、その場合、得点はGPAの計算には算入されない。学士課程の卒業要件として、一般に、単位を取得した全科目のGPAが2.00を越えていることが要求される。また、学士課程

から大学院修士課程・博士課程に進学するためには、GPAが3.00を越えていることが要求される。

さて、タイ国内の大学等高等教育機関に設置されているインターナショナルプログラムは、その総数884を数え、その内296が学士課程に置かれたものであり、また350が修士課程に置かれたものであり、さらに215が博士課程に置かれたものである。加えて、これらの課程外に置かれたものが23ある。国立大学に置かれたものが合計629、私立大学に置かれたものが合計255となっている。また国立大学では修士課程が中心となっている（33の国立大学の修士課程に268のインターナショナルプログラムが置かれている）のに対し、私立大学では学士課程が中心となっている（24の私立大学の学士課程に144のインターナショナルプログラムが置かれている）。インターナショナルプログラムの数は、2004年度から2008年度までの間にほぼ倍増している（2009年2月現在）。外国人留学生並びにタイ人学生は、手続きに従って各コースに登録可能である。

チュラロンコン大学は、タイ王国でもっとも古い歴史を有する大学であり、1917年に設立された国立大学であるが、最近、独立行政法人化され「自律的大学」となった。この大学では、ほとんどすべての学部・大学院研究科にインターナショナルプログラムが置かれており、その総数は67を数える。その内訳は、学士課程に置かれたものが11、修士課程に置かれたものが35、博士課程に置かれたものが17、これらの課程外に置かれたものが3となっている。インターナショナルプログラムの教育に従事する教員数は1,434人、事務職員は123人を数える。また、インターナショナルプログラムに登録している学生数は、タイ人が学士課程で1,738名、修士課程・博士課程で1,719名、これに対して、外国人留学生が合計で169名である。なお、これらの数値はインターナショナルプログラム以外のプログラムに従事・登録している教職員・学生を除いたものである（2008年度）。

これらの数字から見てもわかるように、インターナショナルプログラムは、外国人留学生のためのものであるというよりは、タイ人学生のものであるといえよう。多くのタイ人学生が、あるいは将来の留学に、あるいは将来の就職に備えて、英語によって教育が行われるインターナショナルプログラムの各コースに登録している。これらのプログラムに登録するために要求されるTOEFLのスコアは、学士課程の場合で550点以上である。

## インターナショナルプログラムBBAコースの カリキュラムにおける授業科目と担当教員

昨年（2009年）8月～9月の間、私は客員教員としてチュラロンコン大学商・会計学部インターナショナルプログラムBBAコースの授業科目「哲学と論理学」（Philosophy and Logic）の論理学の部分を担当する機会を得た。この科目は、このコースのカリキュラムにおいて学部3年生に配当される必修科目として位置づけられている。この科目に限らず、いずれの授業科目にあっても1回3時間のコースワークが16週間行われ、単位数は3単位である。8週目に中間試験が、そして16週目に期末試験が実施される。

このコースには、各学年に約100名（2009年度以降の入学者は150名）の学生が登録しており、それらの学生が2つ（あるいは3つ）のグループに分かれて割り振られた授業科目を履修する。私が担当したのは、3年次の第2グループであるが、ちなみに、このグループに今年度第1 Semesterにおいて割り振られた授業科目としては、「哲学と論理学」の他に、「会計学特論 I」「人材マネジメント論」「国際ビジネスマネジメント論」「原価計算論」「会計情報システム論」があり、1週間の合計は6科目18単位ということになる。なお、これらの科目はすべて必修科目である。専門科目と教養科目の区別はないが、授業科目の全体を見渡すと両方が含まれていることがわかる。

これらの授業科目を、専任教員と兼任及び客員教員とで担当する。両者（専任／兼任及び客員）の比率は、だいたい半々である。専任教員は全員が欧米の大学で学位を取得した者であるという。また、兼任及び客員教員は、例えば授業科目「哲学と論理学」の場合、前半の論理学に関する部分を私が、後半の哲学に関する部分をチュラロンコン大学文学部哲学科の Kasem Phenpinant 講師が兼任したが、このように一つの授業科目を分担して担当することもある。兼任教員は、チュラロンコン大学各学部から出講する。なお、私は同大学文学部哲学科の客員教員という位置づけであり、BBAコースへは文学部からの出講という形式を取っている。客員教員は広く海外から招聘されており、私が顔合わせのミーティングで出会ったのは、アメリカ、オーストラリア、シンガポール、台湾等の大学からの面々であった。

### 教室における学生の属性とその多様性

教室で学ぶ学生たちには、タイ人学生（正確には、タイ国内の高等学校を卒業した入学者）の他に世界各国からの交換留学生とフルタイムの留学生が含まれる。私のクラスでは、60名中10名のオランダとドイツからの交換留学生が席を並べていた。BBAコース全体としては、さらにアメリカ、カナダ、フランス、スウェーデン、スイス、フィンランド、オーストリア、ノルウェー、シンガポール、韓国そして日本から交換留学生を迎え入れている。これらの留学生は、チュラロンコン大学との協定校からの交換留学生であり、彼ら／彼女らは1年間を留学先で過ごす。当然、留学先で取得した単位は、母校でのコース修了・学位取得に要求される単位数のうちに繰り入れられる。交換留学生に加えて、コース登録者の概ね10パーセントをフルタイムの留学生（4年間のプログラムを履修し、チュラロンコン大学で学位を取得する者）が占めている。なお、BBAコースの場合、最近の入学者のTOEFL平均点は約600点、SAT平均点は約1,200点とのことである。

留学生がタイ人学生と席を並べる教室は、実際、国際的な雰囲気である。しかし、授業していて気づくことは、留学生はいつもいっしょに一つ所に、タイ人学生と一線を画して塊って座っているという事実である。授業中は、タイ人学生も留学生も、同様に活発に発言する。しかし、ディスカッションがタイ人学生と留学生との間で自然にクロスオーバーすることは稀である。後述するように、質問内容にも、タイ人学生のそれとヨーロッパからの留学生のそれとの間では質的な違いが見いだされる。このように属性の異なる学生たちを相手にしながら、できるかぎり双方向的な授業を試みたが、こちらの発するメッセージを異なる資質を持った相手はどう受けとめるかには差異が生ずるため、クラスマネジメントは容易ではない。

### 論理学とクリティカルシンキング

Web上でも閲覧することができる科目一覧のコースディスクリプションには、次のように書かれている。

#### Philosophy and Logic

“Meaning and scope of philosophy; major problems of philosophy; the problems of ultimate reality, knowledge and sources of knowledge, ethics, aesthetics, and applied philosophy; logic

as an instrument of philosophy; nature of inductive and deductive methods of reasoning; principles of valid and invalid reasoning; analysis of reasoning in ordinary language.”（「哲学の意味と射程；哲学の主要問題；究極的実在の諸問題、知識と知識の源泉、倫理、美学、応用哲学；哲学の道具としての論理学；帰納的及び演繹的方法の本質；妥当／非妥当な推論の諸原理；日常言語における推論の分析」）

教員は、一般的に、上に書かれたような要点を押さえた、言い換えれば標準化された授業を実施することが求められる。内容は、一見してわかるように、哲学と論理学のほぼ全体を広く浅くカバーするようのものである。私が担当したのは、上の記述における後半、論理学に関する部分である。この部分を、中間試験を含めて8回で教える。私の講義では、単に論理学の基礎知識を教えるのみならず、批判的に思考するために、どのような点に着眼して議論を分析しなければならないかを平易に解説するよう努めた。また、できるかぎり双方向的な授業を実現するよう心がけた。

ところで、論理学とクリティカルシンキングは似て非なるものである。もちろん批判的思考のために論理的思考は欠かせない。しかし、狭義の論理——logic（あるいは論理的なもの the logical）——は、批判的思考のすべてではない。言い換えれば、形式論理学についての知識は、批判的思考のために必要ではあるが、それだけでは十分ではない。また形式論理学の基礎として従来教えられてきた内容のうちには、日常言語を用いた批判的思考のために必ずしも必要ではないようなものも含まれている。例えば、ふつう命題論理学の講義を行う場合にかなりの時間を割いて教える、記号を用いた演繹的推論の妥当性の証明法などは、たしかにそのテクニックを知っていれば便利なものかもしれないが、日常言語を用いた批判的思考の実践にとって必ずしも有用とはいえないだろう。むしろ、非形式論理学についての知識と、それを応用する能力と技術が養われて、はじめて批判的思考の実践は可能になる。

しかし、非形式論理学の概念については、これまでのところ確立された共通理解があるとはいえない。たしかに英語圏の大学で用いられているようなクリティカルシンキングの教科書をひもとけば、ある程度は共通している内容を見ることはできる。しかし、だからといって、アングロサクソン型の思考法が直ちに完成されたクリティカルシンキングだということにはならない。視野を広げて見れば、大陸ヨーロッパの哲学教育は長い伝統をも

ち、例えばフランスの中等教育最終学年の哲学学級で使われているような哲学の教科書（とくにディセルタシオンやコマンテル・ド・テキストに関するもの）には、批判的思考のために役立つ内容が多々含まれている。また、最近、世界中で、アカデミーの外で盛んになってきている哲学実践（フィロソフィカルコンサルテーションあるいはカウンセリング、ソクラティックダイアローグ、子供のための哲学、哲学カフェ、等々）の技法のうちにも、批判的思考のトレーニングに応用できるものがある。私見では、アジアの高等教育の発展ためには、アジアの風土に適応したアジア型批判的思考の方法論が必要である。アングロサクソン型のそれを直輸入してもなかなか受け入れられない。そもそもクリティカルシンキングを、これが標準型だという枠にはめてしまうのは、批判的思考の精神に反することではないか。

話がやや横道に逸れてしまったが、非形式論理学を教える際、教授する内容には、したがって、用いる教科書や教える教員によって相当の違いが出てくる。それは仕方のないことである。非形式論理学の概念を普遍的に確立する必要があるとは、私は必ずしも思わない。だが、そう思う一方で、少なくとも、それを教える教師は自分なりに目標をもって、どこかにフォーカスを絞る必要があるだろうとも考える。さもなくば、受講生がこれだけは会得したという手応えを得ることができないのではないか。

そのように考えて、今回は、命題論理学と三段論法について最低限の基礎知識を与えた後、虚偽論に焦点を絞って教えることにした。教えた順序と内容については、末尾に参考資料として添付するシラバスをご覧ください。

### 教科書と補助教材

教科書を使用した。しかし教科書といっても、複数のテキストから必要な部分を抜粋し、コピー製本したものである（巻末資料のシラバス、15.2を参照）。また、適宜、新聞記事（Bangkok Post紙）の切り抜きやウェブサイトから引用した文章等も補助教材として用いた。なるべくホットな話題を選ぶように努めた。

教科書には練習問題が付いている。受講生には各章の練習問題を解いてくることを毎回宿題として課した。すると、ほとんどの学生が律儀に毎回必ず宿題をやって来る。授業中に指名すると、「やって来なかったのではありません」などと応じる学生はいない。当然のことでは

あろうが、これは私にとっては驚きであった。というのも、私は大阪大学の全学共通教育（一般教育）においてもクリティカルシンキング入門の講義をもっており、ここでも毎回宿題として教科書の練習問題を解いてくることを受講生に要求しているが、実際、授業中に指名すると、「やって来なかったのではありません」と応える学生が少なくないからである。

補助教材に関しては、教科書で取り上げられている例文や練習問題の文のように、いわば調理されたものではない、生の文章において見られる議論を分析、評価するトレーニングのために用いた。自動車の運転を習う際に教習所の中で運転するのと外の路上で運転するのとはわけが違うように、議論の分析や評価も教科書で習うのと現実の議論を相手に行うのとでは、勝手が異なるものである。

以下にウェブサイトから引いた文章を用いて作成した課題問題の一例を示す。

### Exercise

Story: The Traveling Mother

A woman in El-Salvador in Latin America was traveling to join her husband who had been posted on an international NGO job in Dakar, Senegal in Africa. She was in her advanced stage of pregnancy. A few hours into the flight, the plane faces turbulence and had to land in an airport in Florida, USA. Because of the turbulence and nervousness she gave birth to a premature baby in the US. This baby could have been born a few hours earlier in El-Salvador or the next day in Dakar, Senegal. This is purely a chance of circumstances. We can model the future consumption history of this child depending on where she was born. The fact that the child was born in the US she would consume ten times more petroleum, would travel many times more by cars and airlines, would consume meat many times more and also use and waste water by a huge margin. In the process of evolution in the mother's womb, each child, irrespective of place of origin, has similar nutritional allocation. But it is the society where she is born that very often decides the consumption patterns.

(<http://en.cop15.dk/blogs/view+blog?blogid=1933>)

GHG = Greenhouse gas

Task:

- ・ Identify the conclusion of this story.
- ・ Write down the premises (including any missing premises, if necessary) that lead to the conclusion.

- ・ Reconstruct the argument in an inference form.
- ・ Evaluate the argument. Is it a good argument or a bad argument? Why? Give the reason(s) why you evaluate so.

### 英語で行うクリティカルシンキングの授業 ——問うこと、方法的に言葉と付き合う

インターナショナルプログラムにおけるワーキングランゲージは英語である。奇妙なことには、私が担当したクラスにおいては、教師である私はもちろんのこと、学生たちのうちにも英語を母語とする者は誰もいなかった。そこでは英語は単にコミュニケーションの道具である。私は、正直、BBAコースを教えるティーチングスタッフのなかでは、おそらく英語の実用的能力がもっとも低いのではないかと考えているのだが、幸いなことに、今回、教室で英語を理由として苦情を申し立てられることはなかった。

教室では、できるだけ双方向的な授業を実現できるよう配慮した。具体的には、教師の側から一方的に説明しないよう、学生を自分で考えることへ誘うよう、あるいは学生と一っしょに考えるように心がけた。教員は一般に学生に知識を伝達することばかりに気を取られがちだが、じつはクリティカルシンキングの教育において大事なものは、学生をして考えさせることである。論理学の知識などは、それを考えるために使うことができなければ無用の長物である。

問うことである。学生に対して問いを投げかけることである。そうすることで、結局、双方向的な授業を実現することができる。例えば、論理学のイントロダクションにおいて「思考」(Thinking)とは何であるかを問う。テキストとしてJ. Deweyの『われわれはどのように考えるか』(How We Think)を用いているが、それを典拠に説明するのは簡単だ。しかし敢えてそのように説明することはせず、“What do you think is ‘thinking’?”と問うのである。ここで指名された学生が答えに窮したときには、さらに、例えば次のように問う。“You are thinking right now, aren’t you?” “Can you describe what’s happening in your mind, then?”

このとき、修辭的な問いを巧みに利用することがコツである。問いは相手に思考を強制する。レトリック(修辭学)はロジック(論理学)に劣らず批判的思考のトレーニングにおいては学ぶことが欠かせないものだと私は考えているが、修辭的な問いを発する場合にも、ディアレクティック(弁証的ないし対話的)な仕方でも導

くよう心がけることが重要である。授業はディベートではないのだから、そこでは問いは、学生の意見を論駁することではなく、学生の思考を助け、発展させることが目的であるはずだ。

このとき、教師に要求されるのは、英語で話す能力以上に聴く能力である。問いに反応した学生の答えに耳を傾ける、注意深く答えを聞き取り、それに対してさらに問いを積みかけるように重ねていく。そうして教師は、ディアレクティックに学生との問答を発展させていく。ソクラテスが手本である。しかし、多様な英語(Englishes!)を話す学生たちの発言の聴き取りは容易ではないと思われる向きもあろう。が、心配は無用。そのときには、次に紹介するようなテクニックを用いればよい。“Could you rephrase what you’ve just said in simple words?”と返すのである。あるいは、席を並べている他の学生に、“Who understood what he/she said? Raise your hand, please.”と振るのである。そこで誰も手を挙げなければ、先に答えた学生に対して、“Nobody seems to have understood what you said. Could you say it again in simple words?”と再び答えを求めればよい。また、こうして問答をクラス全体で共有することができるのである。

英語が問題なのではなく、結局、いかに方法的に言葉と付き合うか、が問題なのである。ディアレクティックな問答においては、相手に自由な発言を許してはいけない。冗長な発言は、かえって思考の妨げになる。問いの形を明確にして問い、発せられた問いの形に見合った答えを相手に要求する。「閉じられた問い」(Closed questions)に対しては、“Yes” / “No”で、「開かれた問い」(Open-ended questions)の場合も、“When”, “Where”, “What”, “Why”, “How”などの疑問詞にきちんと対応した答えを求めることが肝要である。英語は、日本語よりもむしろ、こうした問いの形を明確にすることが容易であり、その意味で扱いやすい道具だとも考えられるのである。

### 授業をどう進めるか

1回の授業時間は3時間。途中で10分程度の休憩を挟む。前半で教科書各章の練習問題の解答(前回の後半に解説した章の末尾に付されている)を行い、後半で次章の解説を行う。解説するときにもできるだけ双方向的な授業となるよう心がける。解説に際しては、スライド(パワーポイント)を用いて口頭での説明を視覚的に補う。練習問題の解答に際しては、「正解」を求めること

を敢えて避ける。指名した学生の解答例について、他の学生たちに、“Those who do not agree with him/her, raise your hand, please.”と反対意見を求める。そうして別解の可能性を追求する。自分の解答例を反対意見に抗して正当化できるかどうかが重要である。正当化できればよしとする。正当化に成功しているか否かを公平に判断するために、挙手による多数決で成否を決するのもクラス全員の参加による合意形成の一つの方法である。

「正解」に関して、私のクラスの場合、オランダとドイツからの留学生とタイ人学生の態度に顕著な違いが見られた。タイ人学生は、私が上に述べたような方針から多様な解答を許容すると認めているにもかかわらず、唯一の「正解」にこだわる者が多く、毎回、授業終了後に私のところにやって来て、「結局、試験では、どう書けば満点をいただけるのでしょうか?」といったような質問をする学生が少なくなかった。受験勉強の弊害だろうか。ヨーロッパからの留学生でこういう質問をする者はいなかった。他方、ヨーロッパからの留学生に特徴的なのは、指名された学生の解答例に対して即座に挙手して反論し、自分の意見（別解）の正当性を執拗に主張することである。そうした際には、私は再反論をタイ人学生の側に求めるようにした。例えば、虚偽論において非形式的虚偽として扱われる「対人論法」(ad hominem)と呼ばれるものについて、それが「人身攻撃」(abusive)なのか「状況的」(circumstantial)なものなのか、意見が分かれることがあるが、見方が異なってくる、その背景には文化的なものの見方の違いがあるようにも思われる。アジア人の場合、人物と行為は区別され難いようである。こうした場合、意見のくい違いを学生同士のディスカッションを通じて調停することは、一種の異文化間コミュニケーションである。教師は、そのファシリテーターに徹すればよい。

### 定期試験

私の授業担当は中間試験までで終わった。中間試験は、期末試験と同じ厳格さをもって実施される。試験が行われる教室では、学生は学籍番号順に指定された席に着き、机の上に学生証を提示しなければならない。問題用紙と答案用紙は一人分ずつ綴じられて、教務担当者（事務方）によって配られる。ティーチングアシスタントが試験監督を務めてくれる。試験中に学生がトイレに行く場合、教務担当者あるいは監督者がトイレまで同行する。不正行為防止のためである。他方、教員は、質問に備えて教

室内で待機していればよいだけなので楽である。

中間試験の成績に関して、私の定めたグレーディングポリシーは、授業への参加10%と中間試験の得点40%である。

中間試験の成績は学生に通知される。驚いたのは、得点の通知を受けて、採点した答案の開示を要求してきた学生が複数名いたことである。いずれもタイ人学生であった。その頃、私はすでに帰国していたので、Eメールでそのような問い合わせを受けたわけだが、求めに応じて採点した答案をスキャンしてPDFファイルで送付した。採点結果に対する異議申し立てということではなさそうであったが、「正解」に対する態度にもあらわれていたように、チュラロンコン大学のタイ人学生は点取り虫が多いようだ。この種の学生に「正解」を暗記することではなく、「正解」を批判する姿勢がクリティカルシンキングだということを理解させるのは並大抵ではない。

### 質保証の体制

チュラロンコン大学商・会計学部国際ナショナルプログラムBBAコースは、専門職業人養成プログラムとしてCPA Australia (Certified Practising Accountant Australia) 及びAACSB (The Association to Advance Collegiate Schools of Business) からアクレディテーションを受けている。

学生による授業評価も実施されている。中間試験前の授業終了時にも行われる。教員は何もすることはない。教務担当者が教室にやって来て、アンケート用紙を学生に配付し、回収する。さらに、教員による授業評価（学生の質、設備、コース運営とサポート体制を教員が評価する）も実施されている。以下のような質問項目に記述式で回答する。

#### Instructor's Assessment

1. As compared to another group of students (Ref. Group: \_\_\_\_\_), what is your assessment of the BBA students' capabilities?
2. What is your assessment of the teaching facilities (e.g., classrooms and their equipment)?
3. What suggestions do you have for the BBA administration (e.g., staff support and coordination)?

このような評価は、日本ではあまり例を見ないので

はないだろうか。プログラムの質を総合的に評価するための仕組みとして興味深い。

### おわりに

今回の経験は、日本の大学の国際化について再考するためにも、たいへん有益であった。G30等の政策的予算措置により日本の大学にもインターナショナルプログラムが本格的に導入されようとしているが、タイのみならずシンガポール、マレーシア等の東南アジア諸国は、インターナショナルプログラムの設置に関しては「先進国」である。これらの国々の大学における教育実践の経験から学び得ることは多い。

クリティカルシンキング教育は、チュラロンコン大学ではインターナショナルプログラムにおいてのみならずタイ語で行われる通常のプログラムにおいても各コースの基礎科目として授業科目が設けられ、広く行われてい

る。但し、私が授業見学を通して見聞した限りでは、ここでは知識伝達型の一方向的授業が依然として行われており、双方型授業の実現には至っていないようである。タイの風土のもとでは教員と学生の間、われわれが想定している以上に強い権力関係が存在する。それを乗り越えることを可能にするような批判的思考の能力と技術を育てる方法論を現地の教員との共同研究を通して模索中である。

### 参考文献

Study in Thailand 2008-2009, Commission on Higher Education, Bangkok (ISBN 978-974-650-989-3)

【本稿は、科学研究費補助金・基盤研究(C)・「批判的思考教育のアジア型適応」(研究代表者、望月太郎、平成21年度)の成果の一部である。】

## 参考資料

## Course Syllabus

1. Course Number: 2207103
2. Course Credit: 03
3. Course Title: Philosophy and Logic
4. Faculty / Department: Department of Philosophy, Faculty of Arts, Chulalongkorn University
5. Semester: First
6. Academic Year: 2009
7. Instructor(s): Taro Mochizuki, Ph.D. (Logic)  
Kasem Phenpinant, Ph.D. (Philosophy)
8. Course Conditions:
  8. 1 Prerequisite Course: None
  8. 2 Corequisite Course: None
  8. 3 Concurrent Course: None
9. Course Type: Required
10. Program: Bachelor of Business Administration International Program (BBA)
11. Course Level: Undergraduate
12. Number of Hours/Week: 03 (Mon. 13.00-16.00) Section 1
13. Course Description: The meanings and scope of philosophy, major problems of philosophy such as the problems of ultimate reality; knowledge and sources of knowledge; ethics; social philosophy, and applied philosophy; introduction to logic as an instrument of philosophy, inductive and deductive methods of reasoning, the principles of valid and invalid reasoning, as well as analysis of reasoning in ordinary language.
14. Course Outline
  14. 1 Objective: Students are able to
    14. 1. 1 Explain the process of reasoning correctly.
    14. 1. 2 Distinguish and explain various kinds of fallacies.
    14. 1. 3 Discuss, analyze, and criticize philosophical arguments and arguments in everyday life
  14. 2 Weekly topic

Class	Date	Topic
1	10/8/2009	Logic: Introduction; reading John Dewey's How We Think, Chapters 1, 2 and 5
2	17/8/2009	Logic and Critical Thinking (1); reading Rod Jenks' Chapters 1 and 2: Formal and Informal Logic; Explanations and Arguments
3	24/8/2009	Logic and Critical Thinking (2); reading Rod Jenks' Chapters 3 and 4: Induction and Deduction; Enthymemes
4	31/8/2009	Logic and Critical Thinking (3); reading Rod Jenks' Chapters 5 and 6: Informal fallacies; Analysis
5	7 /9/2009	Formal fallacies (1); affirming the consequent, conclusion which denies premises, contradictory premises, etc.
6	14/9/2009	Formal fallacies (2); illicit process, positive conclusion/negative premises, quaternio terminorum, undistributed middle, etc.
7	21/9/2009	Informal fallacies; emotional appeals, appeal to authority, appeal to tradition, etc.
8	28/9/2009	Midterm Exam. (On Logic – 40%)
9	5 /10/2009	Philosophy: What is “what is philosophy?”
10	12/10/2009	Philosophical task and its quest for truth, morality and beauty
11	19/10/2009	Philosophical knowledge and its epistemological affirmation
12	26/10/2009	Ethics as a conduct of life
13	2 /11/2009	Justice as a basic principle of human community
14	9 /11/2009	Man, politics and a political animal
15	16/11/2009	Arts, aesthetics and an idea of beauty
16	23/11/2009	Final Examination (On Philosophy – 50%)

Students with less than 80% class attendance will not be allowed to take the final examination.

- 14. 3 Teaching Methods: Lecture and discussion
- 14. 4 Teaching Aids: primary text, articles, powerpoint materials, movie
- 14. 5 Course Evaluation:

Logic: Midterm Exam = 40%, Participation and Discussion = 10%

Philosophy: Final Exam = 50%

Grading: The standard of grading is as follows:

A = 80-100%

B+ = 75-79%

B = 70-74%

C+ = 60-69%

C = 50-59%

D+ = 45-49%

D = 40-44%

F = Below 40%

## 15. Textbooks and other Course Materials

### 15. 1 Required Textbooks

Logic:

Dewey, John [1910]. *How We Think*. Amherst, New York: Prometheus Books (Great Books in Philosophy), 1991. pp.1-28; 56-67

Jenks, Rod [2007]. *Logic and Critical Thinking*. Lanham, Maryland: University Press of America. pp.1-32

Pirie, Madsen [2006]. *How to Win Every Argument*. London: Continuum International Publishing, 2008. pp.7-9; 35-39; 49-51; 65-69; 74-76; 97-99; 130-131; 133-136; 168-171

Angurarohita, Pratoom [2009]. *Logic for Critical Thinking*. Bangkok: Chulalongkorn University Press. Chapter 8, pp. 156-177.

Philosophy:

Collection of excerpts and articles

### 15. 2 Supplemental Textbooks:

Logic:

Copi, Irving M., and Cohen, Carl. *Introduction to Logic*. New York: Macmillan, 1990.

Hurley, Patrick J, A. *Concise Introduction to Logic*. Belmont, Calif.: Wadsworth, 2006.

Jacquette, Dale. *A Companion to Philosophical Logic*. MA: Blackwell, 2002.

Thomson, Anne, *Critical Reasoning: A Practical Introduction*. London: Routledge, 1996.

Waller, Bruce N. *Critical Thinking: Consider the Verdict*. NJ: Prentice Hall, 2001.

Philosophy:

Earle, William J., *Introduction to Philosophy*, New York: McGraw-Hill, 1992.

Perry, John, and Bratman, Michael, eds., *Introduction to Philosophy: Classical and Contemporary Readings*. Oxford, Oxford University Press, 1986.

Solomon, Robert, C., *The Big Questions: A Short Introduction to Philosophy*. Orlando: Harcourt College Publishers, 2002.

Solomon, Robert, C., *Introducing Philosophy*. Orlando: Harcourt College Publishers, 1997.

### 15. 3 Electronic Media or Websites:

<http://www.ipl.org/div/subject/browse/hum70.00.00/>

<http://www.philosophypages.com/>

## 16. Evaluation

- 16. 1 Type of teaching evaluation form: Form 8

16. 2 Improved syllabus and new materials: Changes of teaching media, articles, and supplementary readings for contemporary relevance.

(もちづき たろう 大学教育実践センター・教授)